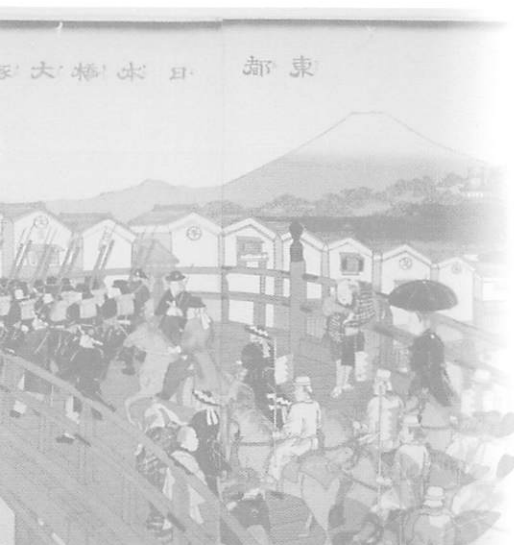


2010年度 駿台史学会大会

【研究発表要旨】



駿台史学会

2010年12月4日(土)

於：明治大学駿河台校舎リバティタワー6階・1063教室

プログラム

午前の部

自由論題 (9:30～11:50)

リバティタワー 1063 教室

午後の部

2010 年度テーマ

『江戸から東京・明治へ——「江戸」お膝下の明治維新』

リバティタワー 1063 教室

趣旨説明 (12:50～13:00)

研究発表 (13:00～17:00)

途中休憩 (15:00～15:10)

質疑応答・討論 (17:00～17:30)

全幹事会 (17:30～18:00)

リバティタワー 1063 教室

総会・懇親会 (18:00～)

リバティタワー 17 階 スカイラウンジ

自由論題

北周六官制における司会の地位と機能	会田 大輔 2
17世紀イングランドにおけるユダヤ教化の歴史的意義 —「ジョン・トラスク」の表象をめぐる—	穴井 佑 4
弥生時代後半期の集落と墓にみる集団分化と統合への道 —中国地方主要遺跡群の比較検討を通して—	日隈 広志 6
幕末期の譜代大名による公儀権力の相対化の一考察 —宇都宮戸田家における天狗党の乱の対応を事例として—	鈴木 挙 9

2010年度テーマ

『江戸から東京・明治へ —「江戸」お膝下の明治維新—』

『江戸から東京・明治へ —「江戸」お膝下の明治維新—』 2010年度駿台史学会大会統一テーマ趣旨	氣賀澤 保規 14
権力の移動と政治—江戸・京都・東京—	落合 弘樹 16
都市の幕末維新—東京・京都と江戸の改造—	松山 恵 18
「錦絵」にみる江戸から東京へ——明大博物館所蔵錦絵から	富澤 達三 20
ロシア正教会宣教師がみた明治—日本と世界の「結び目」ニコライ堂—	豊川 浩一 22
芝居小屋の変遷からみた江戸・東京—浅草猿蓑町などから—	井戸田 総一郎 24
東京・京都と神田祭—明治初年の神田祭の変遷を素描する—	岸川 雅範 26

北周六官制における司会の地位と機能

会田 大輔

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・アジア史)

六世紀半ば、華北を支配していた北魏は、六鎮の乱をきっかけに東西に分裂した。そのうち、長安に都を置いた西魏では、武川鎮出身の宇文泰が実権を握り、557年に子の宇文覺が北周を建国した。この西魏・北周から隋・唐の支配者層が誕生したのである。いわば、西魏・北周は南北朝時代と隋唐時代の連結点にあたっており、隋唐時代の淵源を探る上でも研究の欠かせない王朝なのである。

西魏・北周では、恭帝三年(556)に魏晉官制の流れをくむ北魏官制を廃止し、西周の官職体系を示すとされる『周礼』に基づく六官制(天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官)を施行した。しかし、開皇元年(581)に北周を篡奪して成立した隋は、六官制を廃止し、北魏官制を用いた北齊の官制をもとに、三省六部制を整備した。六官制が隋に継承されなかったことや、正史史料に関係記事が少ないこともあり、北周における六官制については不明点が多い。近年、官名の比較などを通じて、六官制が隋官制に与えた影響について研究が進められている。しかし、六官制の実態が不明なままでは、隋官制との連続性を解明することは難しい。

六官制については、王仲華氏が史料を博搜し、官名・就任者・職掌などを明らかにしている。しかし、六官制がどのように機能していたかについては未だ検討されていない。また六官制のうち、皇帝側近にあたる内史や御正・禁衛については研究が進められている。しかし、北周前半期(557年～572年3月:宇文護執政期)は、皇帝の従兄の宇文護が都督中外諸軍事(軍事長官)・大冢宰(天官府長官)に就任して実権を掌握しており、皇帝側近の内史・御正は政権の中枢に位置していなかった。この時期、宇文護を補佐し、六官を統括していた官職が司会中大夫(天官府)である。しかし、これまで司会の職掌については、『周礼』の記述から財務長官に類する官職であり、臨時的に六官を統括していたとするのみで、本格的に検討されてこなかった。これに対し焦培民氏は、司会は北魏の行政長官にあたる尚書令・尚書僕射に相当する官職であるとする。本報告では、北周六官制における司会の地位・機能を分析し、六官制の運用状況の一端を解明したい。

『周礼』は司会の職掌を政務や財政の監査としている。また、後漢末に『周礼』に注をつけた鄭玄は、司会は天下の会計を掌る官職で、後漢の尚書に類するとしている。焦培民氏は、鄭玄注と正史の記述から、司会は宇文護を補佐して百官を監督しており、事実上、尚書令・尚書僕射の職権を持っていたとする。果たして司会の職権は、北魏の尚書と全く同じだったのだろうか。『周礼』鄭玄注にみられた後漢の尚書台は、主に文書伝達の中核機関として、皇帝の支配意思を実現するための環境を整備していた。後に尚書の権限は拡張し、北魏後半期の尚書省は、国政の執行機関に位置付けられた。政策決定を行う宰相機関であったという見解も存在する。しかし、北魏の東西分裂後、西魏では宇文泰の幕僚(大行台・丞相府)が政策を策定しており、尚書省は行政

執行機関にすぎなかった。さらに恭帝三年（556）の六官制施行後、尚書省は解体されてしまった。北周建国後、宇文護が実権を掌握し、天官府が他の五官を統べるようになると、司会は宇文護のもとで六官を統括するようになった。しかし、尚書省が解体されていることから、司会が北魏の尚書令並みの権限を持っていたとは考えにくい。墓誌史料からは、司会が文書処理を職掌としていた様子が窺えた。このことから北周の司会は、北魏の尚書のような強い権限を持った行政執行機関であったわけではなく、後漢の尚書台と同様に、六官からの上奏などの統括と政策の伝達を掌っていた可能性が考えられる。

宇文護執政期は胡族・漢族などの多様な勢力に配慮しながら、中外府幕僚が政策立案していたと考えられる。この時期、司会には西魏以来の功臣・胡族系元勳の子弟・宇文護側近が就任していた。司会の本来の職掌はあくまで政策伝達であり、宇文護側近が就任した時のみ六官に対して強い影響力を持ったものと思われる。宇文護にとって司会は、円滑に行政執行し、政権を維持するために欠かせない官職であったのだろう。一方、天和7年（572）に武帝が宇文護を誅殺して親政を開始すると、中外府は廃止され、天官府と他の五府も同格に扱われるようになり、官僚ポストも大幅に削減された。その一方で内史・御正などの皇帝側近の権限が強化され、政策立案に関与するようになった。この時期、司会には熟練した官僚が就任するのみであり、本来の政策伝達を掌る官職として扱われたものと思われる。

武帝親政期に官僚ポストが削減され、皇帝側近の権限が強化された結果、皇帝の恣意性も強まっていった。このことが武帝没後の宣帝の暴政につながったと考えられる。武帝は皇帝親政にふさわしい新たな官制構造の創出に失敗してしまったのではないだろうか。

17 世紀イングランドにおけるユダヤ教化の歴史的意義

—「ジョン・トラスク」の表象をめぐる—

穴井 佑

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・西洋史)

17 世紀前半のイングランドは、いまだ「長期の宗教改革」のさなかであった。宗教的な価値観の変容は、社会・経済上の変化による貧困の拡大とあいまって、善行としての「貧民救済」を、負担としての「救貧行政」へと転換させた。そのため、救貧行政のおもな担い手となった、穏健なピューリタンをふくむ敬虔な人びとからは、安息日厳守主義や居酒屋の規制などといった「生き方の改革」が叫ばれた。そこでは、敬虔であることが、社会や国家の秩序維持における要石となったのである。その一方で、長く続いたカトリック、プロテスタント両陣営による激しい論争は、宗教的な真理をめぐる懐疑を生み出し、近世ヨーロッパ社会に知的危機をもたらした。それは、15 世紀以来の地理的なヨーロッパ世界の拡大に後押しされて、既存のキリスト教的世界観には収まりきらない数々の「例外」を露わにした。いわゆるピューリタン革命における、急進的ピューリタニズムの台頭も、こうして準備されたのである。宗教の複数性の可視化や知的エリートらによる千年王国論の高揚は、その帰結であった。

穏健なピューリタニズムは、経済的な不安定や混乱が増していくなかで、社会統制や規律のための源泉として好意的に受け入れられただけでなく、国家の統合にも寄与していった。しかし、それとは相いれない、急進的なピューリタニズムは、統治者層によって、排除すべき対象として、表象・可視化されたのである。本報告の対象となる、ジョン・トラスクの表象化の過程には、とりわけ上記のような「排除」の側面がどのように行われたかが明確に表れている。

トラスクは、国教会からの分離主義、土曜日の安息日厳守を含むユダヤ教化、国王を軽視するような物言い、国教会の主教らに対する中傷、反律法主義的な説教などによって、1610-30 年代のイングランド社会を騒がせた人物である。しかし、このようにさまざまな面で国家の社会秩序維持にとって障害となったにもかかわらず、彼は多くの場合、「ユダヤ教化のトラスク」としてのみ描かれてきた。たとえば、1618 年には、国王ジェームズ一世によって、彼と彼の信奉者は、ピューリタニズム的な逸脱を見せる「ユダヤ教化のトラスク派」として弾劾された。1640-50 年代には、多種多様な異端を列挙した「異端のカタログ」において、「ユダヤ教化のトラスク」が描かれた。また、そうしたトラスク像は、1660 年代以降、トマス・ブランツによる『難語解説』（1661 年出版の第二版）などの、「辞書」類において引用されていった。このように、ユダヤ教化の側面ばかりが、繰り返し語られることによって、「ユダヤ教化のトラスク」像が定着していったのである。

では、なぜトラスクは、「ユダヤ教化のトラスク」としてばかり表象されるようになったのだろうか。その表象

化には、どういう人びとが、どのようにして、何のために関わっていたのだろうか。これらの点が問われるべきである。本報告では、こうした表象化の過程を解き明かすことで、以下の三点を明らかにすることが主要なねらいとなる。第一に、当時の統治者サイドにおける宗教的な言説の利用を具体的に明らかにする。ここでは、とりわけ安息日厳守主義をめぐる議論を考察の対象としたい。次に、ある個人の表象の構築が強い政治性を帯びていたことを解明する。また、それらが「異端のカタログ」や「難語解説（辞書）」などといった、17 世紀特有の思想的背景や知の媒体と深く関与していたことを考察したい。そして最後に、ユダヤ教化をめぐる議論を通して、ユダヤ教に与えられる価値の変容が、17 世紀半ばに議論されたイングランドへのユダヤ人再入国問題に大きな影響を与えていたことを明らかにする。以上の三点から、17 世紀イングランド社会におけるユダヤ教化の歴史的意義を再考することが本報告の課題となる。

弥生時代後半期の集落と墓にみる集団分化と統合への道

—中国地方主要遺跡群の比較検討を通して—

日隈 広志

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・考古学)

はじめに

弥生時代後半期の列島社会における政治的権力の形成については、北部九州で後漢鏡・金属武器の多数副葬や方形区画された住居址群などに王権による諸集団の統合と格差・序列化を読み取ることができる。北部九州以東の西日本諸地域でも墳丘墓大型化に首長権の伸張を見出してきた。

しかし近年、丹後半島を中心とする北近畿では山間の狭い盆地にもかかわらず大量の玉類や素環頭大刀など威信財を副葬する弥生時代後期の集団墓が多数発見された。それは弥生時代後半期の西日本における政治的権力の形成が農業生産の向上による首長権の伸長というプロセスにとどまらない可能性を示した。同時に、権力形成の背景にある地域社会の構造が地域間相互にどのような異同にあるか問題を提起した。

そこで本論は、日本列島初期の政治権力の形成過程を復元する準備作業として、中国地方に展開する弥生時代後期の主要な遺跡群を相互に比較し地域間の異同を図式的に検討した。比較では集落の立地・構成と墓域の構成・規模に重点をおきつつ、副葬品の内容を加味した。集落遺跡の分析にあたり、平野の微高地や丘陵・丘陵尾根などで区分される居住・生活域を集落、集落内で観察できる1～複数軒からなる竪穴住居のまとまりを居住単位とした。

I 集落の立地・構成と墓域の規模にみる対応関係

中国地方の平野・盆地に展開する弥生時代後期の遺跡群は集落遺跡の立地・構成と墓域の構成・規模が概ね対応し、2大別2細分できる。

A類：集落を構成する居住単位が3以上で、径約3～6kmの範囲に集落群が密集する。集団墓と墳丘墓が築造される。

A1類：集落群が平野微高地に形成される。大規模な墳丘墓が築造される。

例) 岡山県足守川下流域、島根県出雲平野、鳥取県鳥取平野

A2類：集落群が丘陵上に形成される。大規模な墳丘墓は築造されない。

例) 鳥取県米子平野

B類：集落を構成する居住単位が1～3で、集落群は密集しない。主に谷間や丘陵裾部の扇状地に集落が形成される。集団墓が形成される。

例) 京都府竹野川流域、兵庫県豊岡盆地、兵庫県氷上郡・多紀郡地域

このうち、本報告では岡山県足守川下流域、鳥取県米子平野、京都府竹野川流域の遺跡群を取り上げる。

I-1 岡山県足守川下流域の集落と墓域 — A1 類

岡山県南部足守川下流域では、沖積平野の東西南北6kmの範囲に2～3の集落群が分布する。集落は河川脇の自然堤防上に形成され、部分的ながら高塚遺跡や津寺遺跡は複数の居住単位からなる集落と想定できる。とくに竪穴住居間、居住単位間で出土遺物に格差はみられないが、海岸部の上東遺跡で波止場状遺構が検出されており、集落間の機能差がみてとれる。

集落近傍の丘陵上に展開する墓域はほぼ集落群に対応し、後期前半は集団墓が、後期中葉以降は楯築墳丘墓をはじめ墳丘墓群が築かれる。墳丘規模と副葬品において楯突墳丘墓は卓越し、立地位置から足守川下流域を統合した首長墓と想定される。

I-2 鳥取県米子平野の集落と墓域 — A2 類

鳥取県米子平野では、径3km圏の遺跡群を7～10抽出できる。中期の平野微高地上に分布した竪穴住居1～3軒の居住単位が、後期初頭以降は丘陵上に集落をなす。大山山麓の妻木晩田遺跡は後期中葉では約170haにおよぶ領域に20数単位の居住単位が展開する。居住単位間で規模や特定の区画など格差はみられない。同様の展開は越敷山遺跡群、福市・青木遺跡群でもみてとれ米子平野の一般的様相といえる。

集落に近接する墓域では長辺10m前後の小規模な四隅突出型（方形）墳丘墓が累積的に築造される。副葬品はとくになく、集落間を統合したような大規模な墳丘墓も築造されない。集落間もとくに格差はみられない。

I-3 京都府竹野川上流域の集落と墓域 — B類

丹後半島の竹野川上流域は、径約3km圏内に0.5～1.5kmの間隔で後期初頭の三坂神社墳墓群に始まる4つの墳墓群が後期後葉まで形成される。これらは丘陵尾根に階段状に墳丘平坦面を作り出す集団墓で、三坂神社墳墓群で3号墓第10主体部を代表に碧玉・ガラス製の玉類合計3000点以上が、また威信財である素環頭大刀が副葬される。他に丹後半島では後期前葉の墓域が2遺跡に限られ、隔絶した被葬者集団が想定されている。

この墓域に対応する集落範囲は、弥生中～後期の拠点集落と目される大宮売神社遺跡をはじめ河岸段丘・扇状地に径約5kmの範囲で2～3ヶ所が想定される。集落範囲は今後拡大すると予想されるが、中期後葉の大規模集落である奈具岡遺跡が後期初頭を境に1～2の居住単位へと激減することを考慮して、未調査を含めても1～3の居住単位で1ないし2の集落を構成すると考えたい。

II まとめと若干の解釈

以上のように3地域では集落と墓域の立地・に対応関係がうかがえる。A1類は複数の居住単位からなる集落群、A2類は複数の居住単位からなる1・2の集落（群）、B類は1～3の居住単位からなる1集落と考える。

ただ、大規模墳丘墓の築造が始まる後期中葉後半～後期後葉では、丹後地域でも一過的ではあるが、終末期前半に大型墳丘墓である赤坂今井遺跡が築造されている点は注意を要する。この現象を福永伸哉氏はT.ダルトロイとT.アールの首長制論における「貴重品財政」論を用いて、「貴重品の生産や交易の管理を通じて」「階層関係や中心周縁関係を明確にする」いっぽうで、「交易などによって秩序が容易に崩れ去ってしまうという不安定さ」があると説明する。福永氏が想定する首長制論をより実証的な根拠に基づいて性格付けするために、本論で推定した集落・居住単位の解明が今後も鍵になるだろう。

本論で取り上げた諸地域は瀬戸内と日本海を通じた交易ルート上にある。弥生中期後葉以降、北部九州を窓口とした交易の活発化が指摘されて久しい。各地域が交易の恩恵を受ける中で北近畿のように独自の階層分化を進行させたことは想像にかたくないが、その場合でも地域内の集落と墓域から集団の構成とその変遷を捉える作業は今後も重要な位置を占めるだろう。本論ではA1・A2類が交易ルートの要衝でどのような役割を果たしながら統合的な権力体を形成したか検討できなかった。今後の課題としたい。

幕末期の譜代大名による公儀権力の相対化の一考察

—宇都宮戸田家における天狗党の乱の対応を事例として—

鈴木 拳

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・日本史)

幕末維新期の政治的動乱は、いかなる形で近代的な主権国家に日本を改編させ、西洋の秩序体系に組み込むかという問題を巡って繰り広げられたと筆者は考えている。今回はこの認識を前提として文久三年後半～元治元年の政治動向を、地域的には関東を、視座としては譜代藩である宇都宮戸田家に置いて考察する。

宇都宮戸田家に注目する理由としては、これまで対親藩、対外様の勢力として捉えがちであった譜代藩が、そうした勢力と積極的に同調していたことを明らかにするためである。また、地域として関東を選択した理由としては、これまでの文久二年以降、京都政局という語に象徴されるように、政局の中心が京都に移ったとの認識を捉え直すためである。結論から先に言うならば、一橋慶喜を中核とする水戸系親藩勢力に同調した宇都宮戸田家から、横浜鎖港問題を発端とする天狗党の乱を見ることにより、当時の徳川公儀権力内で政争と諸藩との関係を解明し、京都政局が独立した要因を考察したい。

また、当該期の宇都宮戸田家の先行研究は、『宇都宮市史』を初めとして、概して地域と天狗党と関わり、天狗党追討軍の動向に議論が集中していた。今回は、政治史的なアプローチから迫ることにより、宇都宮戸田家の新たな政治の一局面を開くことにも寄与したい。

八月十八日の政変以後も、「文久国是」に基づく奉勅攘夷体制の中で横浜鎖港問題は、政局の焦点となっていた。しかし、その実行は遅れていた。そこで横浜鎖港を促すべく水戸徳川家の藤田小四郎らが、元治元年三月二七日筑波山において挙兵した。四月五日には宇都宮に至り、宇都宮戸田家に暗に協力を要請した。宇都宮戸田家の担当者である県信緝は態度を保留した。そこで藤田らは日光参詣を申し出た。県らは日光奉行の許可を得ること、武装解除して参詣することを条件に日光参詣を認めた。しかし、日光奉行は天狗党の日光参詣を禁止し、日光警備強化を求めた。この事態に県は直接日光に行き、日光奉行を説得し、武装解除の上での日光参詣を認めさせた。その後、天狗党は例幣使との接触を模索しつつも、大平山に立て籠もり、周辺地域での金策を行う一方、諸藩に協力を求める。

一方で徳川公儀勢力の動向であるが、当時将軍が江戸に不在であり、留守幕閣は宇都宮・日光で進展する事態に十分な対応がとれずにいた。また、当初は水戸徳川家内の問題として、水戸徳川家に対応させようとしていた。しかし、藩主徳川慶篤や武田耕雲斎は天狗党に同情的であり、天狗党問題の解決よりも横浜鎖港問題の解決の優先とした。このように両者の意見は天狗党問題と横浜鎖港問題の優先順位を巡り対立し、膠着状態に陥った。

そこで両者は事態の打開に向けて、天皇と将軍のいる上方へと工作を開始する。結果的には慶篤らが勝利し、朝廷から政事総裁職松平直克が横浜鎖港の担当者として指名され、直克は江戸に下向する。また、四月二〇日の「元治国是」にも横浜鎖港が盛り込まれた。

「元治国是」と前後して宇都宮戸田家では藩是の転換が行われる。これは、京都にいた元家老戸田忠至からの意見が契機に起こったもので、内容としては横浜鎖港問題を優先とすることを幕閣に建白するというものである。これは宇都宮戸田家が譜代幕閣ではなく、一橋慶喜や慶篤、直克ら水戸系親藩勢力と同調して行動することを意味していた。

宇都宮戸田家では国家老戸田公平が直接建白の任に当たった。五月一日には老中板倉勝静との面会が実現するが、当然ながら追討を含む天狗党問題の解決を優先する幕閣がそれを受け入れるはずもなく、以後宇都宮戸田家は天狗党の同調者として嫌疑の目を向けられる。

一方で公儀権力内では五月一〇日に江戸に戻った松平直克が幕閣の抵抗に遭い、横浜鎖港の実現出来ないでいた。そこで直克は六月三日に老中・若年寄の大量罷免を要求した。しかし、これは幕閣の支援を受けた勢力により国元でクーデターが起こり、「変心」した慶篤によって翌日批判され、両者が引きこもる事態に陥った。そして、結果的には幕閣を主導していた板倉勝静と松平直克は両者とも罷免されることになり、横浜鎖港に否定的な勢力が主導権を握る。この一連の動きに対して、宇都宮戸田家では県が六月四日に直克に面会するなどより直接的な協力関係の構築を企図していく。しかし、これは県単独の動きであった。国元では日光警衛の免じられたことを契機として政変が起き、江戸にいた県にも国元帰還命令が下っていた。そして、宇都宮に帰国した県は処分される。

それでは県を中心とする宇都宮戸田家は、どのような思惑で親藩勢力に同調したのか。宇都宮戸田家、少なくとも県は徳川公儀権力が危機に陥ったなら、御三家が筆頭に立ち、改革を行うべきだと考えていた。つまり、主権の代行者として将軍を想定し、御三家がそれを補助し、譜代藩にはその吏員として地位を与えていた。そして、今回の直克らの動向はそれに呼応する動向であり、それに積極的に応えようとしたのである。この動向は県個人に収斂されるものでない。天狗党討伐の際、宍戸松平家藩主松平頼徳をも追討の対象になるに及び、宇都宮戸田家ではこれに疑問を呈して、無断帰国する。これは、譜代藩が公儀権力を相対化し、改革や命令の拒否など強度の違いこそあれ、それを実行に移したことを意味する。公儀権力は譜代藩にとっても絶対的な存在たり得なくなっていたのである。宇都宮戸田家の場合は二度とも公儀権力から掣肘を受け、譜代藩としての限界を前に挫折する。そして、天狗党の乱での不手際を理由として処分され、藩主の据え換えが行われ、京都で山陵修補事業に当たって戸田忠至が本家から相対的に独立する。

一方で横浜鎖港問題・天狗党問題を梃子とした江戸幕閣への介入をはかり挫折した親藩勢力は、上方で独立した一会桑政権を成立させる。

このように政局は東西に分割・固定され、宇都宮戸田家も東西での相互独立の傾向が顕著となる。そして、元治元年に失敗した親藩勢力との連携の動きは、戸田忠至を中心として、朝廷を権力の源泉として、温存される。

江戸 東京

江戸から東京・明治へ

—「江戸」お膝下の明治維新—

『江戸から東京・明治へ —「江戸」お膝下の明治維新—』

2010 年度駿台史学会大会統一テーマ趣旨

氣賀澤 保規

(明治大学文学部教授・アジア史)

江戸から明治への移行が日本史における一大変革期であったことは言をまたない。それゆえ、行き詰まり状況のなかで自らの足場を確かめ、新たな突破口を求めるために、私たちは往々およそ1世紀半前の当時に想いを馳せる。そして篤姫や坂本竜馬、勝海舟などのような人々に共感し、時代を切り開いたたくましさやひた向きさを我が物としたいと考える。その時代に向ける現代人の視線の後ろには、そのような思いが見え隠れする。

江戸から明治への変革の主たる舞台となった旧江戸の地は、幕府の所在地から新生日本の首都に変わる。目に見える形では將軍家そして旗本、大名やその武士たちが退き、代わって公家や新政府官僚が中心を占めることになった。欧米系の外国人が新たに街中を闊歩し、洋風の建築物が姿をあらわす。人々の外見も立ち居も変わってくる。そうした大きく変わるものがある一方で、なお変わらずに受け継がれるものもある。江戸で暮らしてきた庶民の暮らしはどうであろうか。

従来この転換期を問題にすると、権力の構造変化や時代を動かした人々の行跡などに目を向けた、政治的・社会的考察が主流となってきた。その結果、時代の波をもろにかぶったであろう「江戸人」たちは変化とどう向き合ったか、かれらにとって維新とは何であったのか、そうしたいわば「下」からの問題は必ずしも十分論じられてこなかったように思われる。何よりも「現場」に一番近いはずの私ども駿台史学会にあって、過去にそのような観点からのテーマ設定はなかった。そこで遅ればせながら、幕末から明治初年にかけての大きな転換を、その「膝下」から見直し、時代認識に新たな幅をもたせ、明治維新に別の光をあててみよう、そのような考え方に立って、本年度の大会テーマ「江戸から東京・明治へ——「江戸」お膝下の明治維新」が決められた。

本年度の企画を進めるにあたって、私どもはいくつかの新たな試みを用意した。駿台史学会大会は学内の会場の事情もあって、毎年学会シーズンの終了する12月上旬に開かれることが定着しつつある。そのため、毎回の大会テーマや報告内容は工夫をこらし、中身もかなり力が入っていたが、しかし出席者は限られ盛り上がりや結果を欠く結果となった。このような状況を少しでも変え、停滞気味の大会を盛り上げ、地域への貢献と研究活動の活性化をはかりたい、そうした企画側の意図を理解いただければ幸いである。

新たな試みとして意識したものは次のようなところである。

- (1) このテーマによって地元との連携をはかったこと。そのためまず千代田区役所と連絡をとり、趣旨を理解してもらった上で大会の後援者に名を連ねる了解を得、また千代田区の催し物案内に紹介いただいた。これに

よって近年求められている大学と地元との連携、千代田区を中心とする地域社会への貢献に一步近づくことができた。

(2) 地域社会といえは、地元でありながらこれまで直接交流のなかった神田神社（神田明神）から、同資料館の岸川雅範氏が本企画の意図を理解され、「東京奠都と神田祭」の報告をしていただけることになった。これによって当企画の幅が広げられるとともに、今後の研究協力への可能性が開けることとなった。

(3) 学内に目を転ずると、明大博物館がこれまで継続的に集めてきた幕末明治期の「錦絵」を用いて、ビジュアルな形でその時代を考える機会が用意できた。これについても博物館側は快く資料提供に応じてくれただけでなく、この機会に関係資料のデータ化を進め、また大会の後援に加わることも快諾いただいた。学内の他部門の協力という形もこれまでにないものである。

(4) 次に学部内であるが、駿台史学会は史学地理学科に足場を置く学会であるため、従来文学科との連携・協力の試みはほとんどなかった。しかし今回は「江戸学」を推進する文学科ドイツ文学の井戸田総一郎氏が、私どもの趣旨に積極的に賛同を示し、そのお蔭で両学科の連携という新たな形が実現した。今後の柔軟かつ多彩な企画のために、これは貴重な先例となるはずである。

(5) 今回の企画では幕末明治初年の江戸・東京をめぐる、まず落合弘樹氏がこの転換期を総論し、松山恵氏が都市改造の視点から論じ、富澤達三氏が錦絵によって時代の変貌を押さえる。つぎに後半で地元ニコライ堂を介して外国人からの視線を豊川浩一氏が、芝居小屋を介して庶民の立場を井戸田氏が、また神田明神に現れた祭礼の変遷を岸川氏がと、それぞれ江戸東京の「内側」から取り上げる。改めて従来にない興味ぶかい構成になったことに感謝したい。

(6) 最後に、本年（2010年）、奈良では平城京遷都1300年で大きな盛り上がりを見たことが評判を呼んでいる。それに対して東京（関東）で同様の東京奠都（遷都）の問題では、当企画を除いてはめばしいものはなかった。今後東京奠都150年が話題となっていくとすれば、これがその先駆けとしての役割を果たすことになると思う。

権力の異動と政治

—江戸・京都・東京—

落合 弘樹

(明治大学文学部教授・日本史)

250 年近い平和が維持された江戸時代は、幕藩体制のもとで安定した政治システムが維持され、内発的な経済や産業の発展がみられた。江戸期の都市は、江戸・京都・大坂の三都を中核とした。江戸は徳川宗家の居城である江戸城を基盤とする軍事的性格を持つ都市であったが、徳川将軍家は中央権力＝公儀として存在し、大名は参勤交代して従属を示した。世界有数の人口を持つ江戸は、高度な都市機能を有したことでも注目されている。一方、京都は、御所を中心に、平安京以来の条里制にもとづく都市構造を継承した。近世の朝廷＝禁裏は政治権力ではなかったが、正統性および権威の源泉としての機能を果たした。京都には公儀の拠点として二条城が置かれ、所司代以下の武家が支配を担っていた。また、大坂は商都として、物流や経済の中心地（天下の台所）だったが、西日本最大の要衝として大坂城が置かれ、多くの大名が蔵屋敷を置いた。

三都中心の構造は、雄藩の城下など地方都市の発展や、地域間交易の拡大などによって徐々に変質する。水野忠邦は、物流・経済の統制力を回復し、さらの大名を抑制するとともに海防の強化を図ろうとして天保の改革を断行したが、頓挫した。さらに、ペリー来航がもたらした衝撃は、日本の政治・社会、さらに三都のありかたを大きく変動させる。

天保の改革失敗をうけ、大名との協調を重視した老中阿部正弘は、和親条約調印にあたり朝廷にも詳細な報告をおこなっている。さらに阿部のあとに幕政を担った老中堀田正睦は、通商条約の案ができると、勅許を奏請するために自ら上洛したが、孝明天皇は、勅許を拒絶することにより政治に大きく介入した。大老に就任した井伊直弼は、朝廷および雄藩の政治参入を封じようと「大獄」を断行した。既存秩序の維持に努めた井伊が桜田門外の変で横死したことにより、幕府の中央政府としての権勢は大きな打撃を受ける。

文久期は、開国に踏み切った幕府と、攘夷を「勅慮」とする朝廷という、「ねじれ」のもとで政局は推移するが、「国体」の源泉である天皇の比重は増大し、従前は厳禁されていた大名による朝廷側との折衝も恒常化していく。松平春嶽による文久2年（1862）の幕政改革による参勤交代緩和は、幕閣の権限を抑制するとともに、江戸の政治的地位を凋落させた。さらに翌年の将軍家茂上洛は、将軍が天皇の臣下であることを具象化させた。以降、政局は京都を中心に展開する。ただし、公家社会の人物たちが政治的素養を持たず、朝廷の抜本改革にも消極的なのは自明であった。新秩序の構築＝倒幕を望む人物たち（真木和泉など）は、攘夷断行で幕府を窮地に陥れるとともに、天皇を御所から動座させ、関白を頂点する旧態依然たる秩序から切断することを図り、大和行幸と攘夷親征の軍議を計画するが、八月十八日の政変で阻止され、尊攘激派は文字通り「都落ち」した。

朝幕の融和は一会桑政権のもとで成立するが、対外主権を持つ江戸の公儀よりも在京幕府勢力、とくに禁裏守衛総督となった徳川慶喜が政局を主導し、二重権力の状態となる。

第二次征長戦争が幕府側の惨敗に終わり、将軍家茂と孝明天皇があいついで死去したのち、江戸に帰ることなく新将軍となった慶喜は、薩長連合と対峙していくことになる。周知の通り、慶応3年（1867）の政局は大政奉還・王政復古というかたちで推移する。王政復古は、摂関・征夷大將軍を筆頭とする公家・武家双方の旧体制を抜本的に解体するものだった。慶喜は、京都の咽喉である大坂に拠点を移し、外交権を維持しつつ、新政権中枢への参入を図るが、鳥羽・伏見の戦いに惨敗し、関東に退去・隠遁する。

薩長を中軸とする新政権の担い手にとって、天皇をとりまく儀礼的・身分的な障壁は早期に除去すべきものだった。それは、禁裏空間から大坂行幸を経て、二条城への太政官移転というかたちで断行するが、新しい天皇像を模索するには、京都はあまりに伝統や歴史の残滓が濃く、首都の移転が図られる。西郷と勝による談判で開城され、大総督府・鎮将府の占領下にあった江戸は、衰微したとはいえ、いまだに多くの大名屋敷が維持されており、官庁・役宅に転用可能だった。また、京都中心である「^{みかど}帝」のイメージを、「皇国」全体の帝王に置き換えるためにも、かつて公儀権力の中核だった江戸を新たな都にすべきであるとする構想が浮上し、こうして東京が成立することとなる。

武家政権の拠点だった江戸は、近代国家の中核へと変貌するが、同時に多くの連続性も維持しつつ、首都として展開していくこととなる。

都市の幕末維新

—東京奠都と江戸の改造—

松山 恵

(明治大学文学部専任講師・日本史)

本報告では、幕末維新期の権力のあり方に関する政治史の成果（落合弘樹氏報告）に学びつつ、都市史の観点から「江戸から東京・明治へ」のより具体的な変動について検討する。とりわけ明治初年の東京奠都が、既存の江戸の都市構造—空間と社会の関係性—にどのような影響を与え、ひいては東京の近代化にいかなる条件・特徴を付与したのかについて明らかにしたい。

当該期の江戸東京をめぐるのは、都市史の分野に限っても、小木新造を中心としたいわゆる「江戸東京学」をはじめ、西欧近代的な都市計画受容の全体像を明らかにした藤森照信、また近年では地租改正による土地制度の移り変わりを論じた滝島功や、近世身分制の解体過程を近代東京（日本近代都市）の前提として考察する横山百合子というように、きわめて豊かな研究的蓄積がある。しかし、その一方で、これまで「江戸から東京へ」という移行ないし転換そのものが生み出したインパクトについては、かならずしも十分には顧みられていなかったようにも思われる。

近世日本では「三都」という都市観の成立に代表されるように、複数の都市が重要な機能を分掌していた。しかし、そういった日本中の都市をめぐる社会的諸関係は明治に入って一変する。そこでは、たとえば明治末年の石川天涯『東京学』が記すように、大坂へ、あるいは京都と東京の二京並置へ、などの維新にともなう「遷都」の紆余曲折がありながらも、最終的に江戸（東京）が新政権の所在に定まり、かつ天皇が旧江戸城を恒常的な在所とすることが、非常に重要な転機だったことは間違いない。そして、それにより、東京はわずか数十年のうちに日本中の「仕事」や「文化」の「源」までに捉えられるようになる。

このように、東京が他の都市の機能や要素をも内包するに至る道筋を、現在に続くその一極集中の始まりとして重視し、とりわけ最大の画期と考えられる明治新政府のありかに落ち着く経緯、またその定置そのものに付随する動向一般を首都化と定義したい。このことを明確にすることにより、政治体制にまつわる議論にとどまっていた東京奠都という問題をより豊かに描き出し、実のところ、その後の東京における都市空間の改造・改造計画をも大きく規定する始点だったことが初めて明らかとなるであろう。

おもな検討内容は下記となる。

1. はじめに： 幕末～明治期の都市論を概観しながら、近現代の東京のあり方を考えるうえで、既往研究があつかつてこなかった、さまざまな文化的性質を帯びるものとしての「空間」やその移動の問題を切り口に、明治初年の東京奠都を捉えなおす重要性を指摘する。

2. 首都化の画期について： 旧江戸城がいつから天皇の恒常的な在所となり、また官衙もそなえる「皇城」へと変じたかをくわしく明らかにし、明治2(1869)年3月の再幸が大きな転機であったことを指摘する。

3. 奠都の場： 旧公卿を例に、東京への移住実態を検討し、さきの官衙の所在とあわせて京都の内裏空間がどのように東京に再配分されたかを明らかにする。また当時、武家地の処分をめぐり都市を二分するように設定・再設定がくり返された「郭内」・「郭外」について、うち「郭内」が新都の中心であって実質的な奠都の場という意味を持つものであったことを論じる。

4. 「郭内」と「郭外」： 一方で、都市周辺部に設定された「郭外」が旧大名の再上京先(明治3年11月旧大名東京居住令)にあてられ、まもなくの廃藩置県をへて、その多くが諸芸能を基盤とした民活の場に生まれ変わってゆくことを指摘する。このほか「郭内」・「郭外」をめぐっては当時、複数の場末町の住民が貧富を基準に振り分けられていた事実についても触れる。

5. 「輦轂の下町」の出現： 最後に、このような東京奠都にともなう社会空間の二元化が、その後の東京のあり方に大きな影響を及ぼしていったことを見通す。たとえば、従来、対外的事業としてのみ知られてきた銀座煉瓦街については、町触や道路計画の検討をつうじ、その建設の背景に、数百年もの統治がつづいた江戸幕府に比べ一般の人びとには遠い存在となっていた天皇、またそれを前面に掲げる若年の新政府の先進性や力強さを、東京、さらには日本中にアピールする目的があったことなどを明らかにする。

「錦絵」にみる江戸から東京へ—明大博物館所蔵錦絵から

富澤 達三

(神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員・歴史民俗資料学)

はじめに 錦絵の登場

明和年間（1764～72）の初期、鈴木春信（1725？～70）は多色刷り版画の錦絵（浮世絵版画）を生み出した。当時春信の錦絵は高価で、一説では銀一匁（銭160文）を超えたともいわれている。その後錦絵は江戸の地本問屋が企画し、浮世絵師が版下絵を描き、彫り・摺りの工程を経て制作された。錦絵の制作技術は時代を下るにつれて向上し、大量生産が可能になって価格も下がり、一枚がソーパー杯（銭16文）ほどの値段となった。錦絵には様々なサイズがあるが、最も多いのは大錦（大判）で、縦が約39cm・横が約27cmの大きさである。大錦の絵を横につなげたワイド画面の作品も作られ、値段が100文を超えるものもあった。

1、錦絵の画題

錦絵は「あずま錦絵」として江戸の名物となり、多くの人々に楽しまれた。画題は、歌舞伎役者を描いた「役者絵」・日本各地の名所を描いた「名所絵」・芸妓や花魁を描いた「美人絵」・英雄豪傑を描いた「武者絵」など様々である。幕末期の天保改革（1841～43）では、錦絵はぜいたく品として題材や販売価格・売買の方法などが取り締まりの対象となった。従来、幕末錦絵は歌川広重（1797～1858）の名所絵が注目されるのみであったが、近年では奇想の画家・歌川国芳（1797～1861）や、浮世絵師のなかで最も多くの作品を遺した三代歌川豊国（1786～1864）の作品を中心に評価が高まっている。

また、大事件を題材とした錦絵も注目されている。江戸幕府は、政治批判や巷間の噂を出版物にして不特定多数の人々に売りさばくことを固く禁じていた。しかしながら弘化～安政年間にかけは、全国各地で地震や津波・水害など広域災害が続き、日本に黒船が来航するなど大事件が相次いだ。この時期、事件を伝えた簡易な印刷物、いわゆる「かわら版」が江戸や大坂で続々と出版されて情報活動が活性化したのである。莫大な量のかわら版の出版は錦絵界にも影響を与え、絵と文字で事件を伝えた錦絵＝「時事錦絵」が、嘉永期以降増えてくる。吉原健一郎氏はこれを「錦絵のかわら版化」とした。天保改革で江戸錦絵界は一時不況となったが、改革の失敗後は次第に活況となっていく。

2、「時事錦絵」の定着

絵と文字で事件を継続的に伝えた「時事錦絵」は明らかな際物であるが、人々には大好評であった。「時事錦

絵」の典型として、安政2年（1855）10月2日の安政江戸地震後に出版された鯨絵がある。鯨絵は鹿島大明神と地震鯨の伝説を題材とし、安政江戸地震直後から12月半ばまで150種以上出版された。鯨絵の内容は、江戸で余震が続く間は地震よけのまじないや地震への怒りを表現したものが多かったが、次第に江戸の復興景気を歓迎した「世直し」気分を謳歌する内容へと劇的に変化していく。

また、文久2年（1861）夏の江戸での麻疹大流行に対応して出された「はしか絵」は、麻疹よけの民間信仰・治療法を文字と絵で伝えた錦絵であり、80種以上が確認されている。鯨絵やはしか絵は、フォークロアを巧みに盛り込み商品化した「時事錦絵」であるが、庶民による「時事錦絵」の購買は、日常生活を脅かす災厄を克服するための積極的な行動であり、一種の社会運動として位置づけられよう。

3、明治期の「時事絵」

開港で賑わう横浜と外国人の様子を描いた「横浜浮世絵」も明らかな時事錦絵である。戊辰戦争期になると、新政府側と旧幕府側の戦争を子供の遊びになぞらえた「子供遊絵」が100種類近く出された。ついに「時事錦絵」は、決して描くことができなかった政治的題材すら取り上げたのであった。その後も時事を描いた錦絵は出版され、明治期の錦絵では「時事絵」のジャンルが定着したのである。

本発表では、明治大学刑事博物館が所蔵する錦絵のうち、時事を題材としたものを取り上げ、江戸から明治への変化を画像資料から読みとる。また、庶民向け視覚メディアの変遷について、画題や表現方法等を考察したい。

ロシア正教会宣教師がみた明治

—日本と世界の「結び目」ニコライ堂—

豊川 浩一

(明治大学文学部教授・西洋史)

日本ハリストス正教会の創始者として知られる宣教師・大主教ニコライは幕末から明治にかけて活躍した。ニコライは1861年(文久元年)、まだシベリア鉄道のない時代に、24歳の若さで日本へ伝道の大志を抱き、単身馬車でシベリアを横断し、約1年の月日を費やして、キリスト教禁制下の箱館のロシア領事館付司祭として日本に赴任した。日本に来てからも約8年、日本語はもちろんのこと、日本の歴史や習慣を勉強し、慶応4年(1868年)に最初の信者3名を得ることができた。この年の9月に元号が明治となった。ニコライは50年の長きにわたって布教活動に従事し、日露戦争のときもロシア人外交官全員が引き揚げる中ただ一人日本にとどまった。かれは1912年(明治45年)2月16日、すでに数万に達していた信者に惜しまれながら75歳でこの世を去った。その墓は台東区谷中霊園にある。

ニコライの活動は幅広い。日露両国民の親善と国交にも貢献した。そのため、当時のロシア政府から最高の勲章が贈られ、日本からもかれが永眠した時、とりわけ明治天皇は勅使を派遣し霊前に恩賜の花輪を贈った。

ニコライの事業は正教の伝道が中心であった。かれは大坂懷徳堂出身の漢学者中井木菟庵(なかい づぐまろ、懷徳堂創設者の一人中井菟庵の後裔)という良き助手を得て、日本に来てから永眠するまで、「聖書や祈禱書」を日本語に翻訳し続けた。「翻訳」はニコライのライフ・ワークであった。また東京神田駿河台にあるニコライ堂をはじめとして多くの教会を建設して、多数の正教信者を獲得し布教に努めた。彼の言葉によると、正教が日本とロシアの架け橋である「結び目」になることを望んだのである。

伝道のために行ったニコライの日本研究は、極めて分析的であり、日本の様子を知る上でも格好の資料ともなっている。またかれの「日記」は明治期の日本の様々な側面を伝えている。伝道目的とはいえ、日本で最初のロシア語学校さえ開いている。一言でいえば、ニコライの事業およびかれを取り巻くすべての出来事が明治期日本の姿をよくあらわしていたといえる。

そうしたなかから、明治期の日本の変化の様子を、ニコライの活動およびかれによる伝道の中心である東京復活大聖堂いわゆるニコライ堂(に関わった人々)を通してみようとするのが本報告の目的である。たとえばニコライ堂が完成する明治24年には相次いで事件が起こった。なかでも「不敬事件」をめぐる正教会内部でもこの問題に対する議論が巻き起こった。議論は国家と正教の関係、キリスト教諸派との相違点、その他様々な問題を浮き彫りにした。そうした議論から明治期の日本人が宗教とりわけキリスト教に何を求めたのか、その内容はキリスト教各派で異なるのか、また明治中期から徐々に現れてくる国家主義(ナショナリズム)の動

き、およびそれに対してキリスト教はどのような立場に置かれるのか、などという点をも考えとするのがいまひとつの本報告の目的である。

芝居小屋の変遷からみた江戸・東京

—浅草猿若町などから—

井戸田 総一郎

(明治大学文学部教授・ドイツ文学)

1872年1月30日に東京府は太政官にたいして『劇場制限の伺』という文書をだしているが、これに基づいて太政官は同年2月7日に、劇場制限を緩める決定を下している。これは、天保改革以来の歴史的裁決であり、これによって江戸時代とは異なる新しい劇場展開が始まる。この講演では、この新しい展開が江戸時代の連続性のなかで進んだ過程について紹介する。以下の4つのタイプの展開のそれぞれについて具体的に述べていく。

(1) 第1のグループは、江戸時代に幕府公認の興行権を持っていた三座である。中村座と市村座は、天保年間に猿若町に移転して興行権を維持したが、自由化以後も同地でその活動を継続した。猿若町の一番奥に展開していた守田座は新富町に移転し、新富座と名を改めた。新富座は外国人が多く訪れ(1867年5月に外国人が芝居や茶屋に出入りすることが許可された)、その名前は当時日本を越えて広まって行った。

(2) 隅田川の東側に位置する両国では江戸時代に3軒の小屋掛芝居が存在していた。3つの芝居小屋は見世物的な、時にはアクロバット風の出し物などで庶民に娯楽を提供していた。これらの芝居小屋の周辺の路上には、軽業、手品、演舞、力持などを見せる出し物が賑やかに展開していた。芝居小屋は囲い筵ばりのため雨天には芝居を休み、天気の時ばかり開演するので「青天小屋」とも呼ばれていた。興行の日数も厳しく制限され、あらゆる面で江戸三座に比べて極めて低い地位に置かれていた。1872年の制度変更による自由化によって、これらの「青天小屋」は東京の中心部近くに移り、本格的な劇場になっていく。本郷春木町の奥田座、蛸殻町の中島座、久松町の喜昇座の前身は、両国の小屋掛け芝居であった。喜昇座は現在の明治座の前身である。

(3) 第3のグループは、いわゆる「控櫓」と言われる芝居、つまり三座が財政難に陥ったときに興行を代わって継続した芝居である。歌舞伎において櫓とは、芝居興行権の所有を明示するシンボルであり、小屋の入口上方の屋根の上に掲げられていた。それは方形に組まれており、三方に櫓幕という幕をめぐらし、櫓幕の正面にはそれぞれの座元の定紋(座紋)が描かれていた。幕は紺色であり、正面の定紋と左右両側の座元の名は白く染め出されていた。「櫓をあげること」は芝居興行を打つことであり、「櫓が下りる」ことは休座を意味した。芝居経営は借金の苦しみ、地代の支払いや良い役者への高い給金、さらにたびたび襲った火災などの影響で決して楽観的なものではなかった。芝居が休座になると芝居町全体に影響があり、茶屋などで働く人々を含めると社会不安を醸成する恐れがあった。このような危機を防ぐために、奉行所は1720年頃に、芝居興行の数を増やさずに倒産に対処するために控櫓の制度を発足させた。守田座、市村座、中村座は「元櫓」と称し、それ

それにたいして河原崎座（河原崎権之助）、桐座（桐大内蔵）、都座（都伝内）が控櫓として機能した。このような制度の導入によって、幕府は町人の娯楽の安定供給に努め、芝居に関わる多くの業種の生み出す職を維持しようとしたのである。控櫓の興行は、元櫓が経営に戻ってくるまでのあいだに限られていたが、芝居経営の悪化は日常茶飯事であり、控えの出番は多く存在したのである。明治時代になって三座の興行特権が廃止されるに伴って、控櫓も終焉を迎えた。しかし控櫓を担ったそれぞれの一族は興行権を維持し、新しい劇場となることを許可されたのである。

(4) 第4のグループは文楽の小屋である。歌舞伎の起源と文楽は近いものがあり、筋立てや浄瑠璃などの多くの共通点を持っている。歌舞伎役者は人形浄瑠璃の動きを取り入れ、人形の動きを様式化した役者の動きを作り上げたのである。猿若町では、江戸三座が並ぶ道の向かい側に2つの人形芝居の小屋が展開していた。1867年外神田に人形芝居の薩摩座が開かれているが、それが1873年歌舞伎劇場の沢村座となって東京10座の一つとして認可された。

天保改革期における猿若町の形成についても、上記の説明に関連して紹介する。また、小芝居・大芝居の江戸時代から存在する格差が明治時代においても継承されている点についても言及する。東京の劇場展開については、劇場地図を見せながら19世紀終わりあたりまで概観する。

東京奠都と神田祭

—明治維新直後における神田祭の変遷—

岸川 雅範

(神田神社権禰宜・日本神道史)

維新後、江戸は東京となり、そして明治2年（1869）3月28日、明治天皇が東京に着御しかつての江戸城を「皇城」と定められたことで「東京奠都」は完成した。

それに先立つ明治元年3月13日、祭政一致の制に復し天下の神社・神職は再興された神祇官に属することとされた。神田神社も江戸の各神社も明治政府による神社制度の整備・形成過程を経て、首都・東京の神社として近代化を遂げていった。それに伴い神田神社の祭礼・神田祭もその姿を変化させていくことになる。

神田明神から神田神社へ

神田明神は、天平2年（730）武蔵国豊島郡芝崎村に創建され、江戸幕府開府の後、元和2年（1616）に湯島（現社地・千代田区外神田2丁目）へ遷り幕府より社領30石を安堵された。以後、江戸時代を通じて「江戸総鎮守」と称され、幕府や江戸庶民たちが崇敬した神社であった。

維新を迎え、神田明神は明治元年1月8日に東京府内の著名な神社十社とともに神祇官直支配の「准勅祭社」に定められ、皇城守護と皇軍勝利とが期待された。この時、神田明神は正式な社名を「神田神社」に改めた。その後、4年5月14日の神社は「国家の宗祀」につき神官一人一家のものではないという旨の太政官布告（神職世襲制の廃止と精選補任）をはじめ神社に関する布告が次々に出され、それらを経て翌年5月8日、神田神社は准勅祭社から東京府社に社格を改められ東京の守護神と位置付けられた。

さらに明治以降、明治政府により神社祭祀・祭式制度の統一化が図られ、神田神社の年中行事に祈年祭や新嘗祭などの新しい祭祀が加えられ、紀元節祭や天長節祭など明治期に創出された祭典も多く組み込まれた。江戸時代からの神事「太々神楽」に雅楽・舞楽が追加されるなどの変更も見られた。8年には式部寮より全国統一的な祭祀・祭式として「神社祭式」が示され、後に神田神社の祭式や神田祭にも適用されていった。

氏子区域を定めるために「郷社定則」（4年7月4日）が布告され「氏子町名同人員帳」（5年）も作成された。この氏子区域の確定は神田神社をはじめ府県郷村社にとって非常に重要な意味を持っていた。それは6年に境に神社の運営費及び祭祀執行料、神職俸給が氏子を中心とする「人民の信仰」に委ねられることになったからである。

神田神社ではさらに明治初期に祭神改変もあった。江戸時代の神田明神のご祭神は大己貴命と平将門霊神であったが、平将門公が皇室・明治政府にとって朝敵であるという一部の人々の歴史論の影響もあり、7年に将

門靈神は本殿より摂社・将門神社へ遷座され、本殿には大洗磯前神社より少彦名命の分霊が迎えられ遷座した（現在は、平将門命を本殿三の宮として奉祀）。

天下祭から氏神祭礼、都市祭礼へ

江戸時代の神田祭は2年一度行われ、神輿や山車、附祭や御雇祭などの賑やかな祭礼行列が江戸城内に入り徳川将軍が上覧したため山王祭とともに「天下祭」と称された。江戸幕府公式の「官祀」であった。神輿行列は江戸幕府による費用負担であり、行列に供奉した町々—大伝馬町、南伝馬町—も「国役」としての奉仕であった。また氏子町より出された山車や附祭は行列を出す町やその順番などが幕府により厳しく規定されその遵守が義務付けられていた。

神田祭の巡行路は、江戸の諸神社の祭礼行列が氏子町々を巡る道筋であったのに対し、江戸幕府の「官祀」であるがゆえに江戸城内への渡御を中心とした特殊な道筋で、江戸城内へ入り徳川将軍や御台所が上覧することを第一義とした。江戸時代の神田祭は江戸幕府の天下泰平を祈願し祝祷することが主な目的であったからである。

明治時代に入り、支援母体の幕府も崩壊し、神田祭は江戸諸神社の祭礼同様に行列が氏子区域を渡御する道筋へと変更された。幕府の援助によった神輿行列は当然神職主導となり、氏子町々の行列も幕府からの規定から解除され山車や附祭を出す町も町数も一定せず町々の意に任された。

7年の神田祭では祭神改変の影響、さらに文明開化政策の一環として出された「違式註違条例」による生活風俗の統制、この時期に集中的に出された祭礼に関する取締とそれに対する氏子町々の自粛により祭礼規模の縮小を余儀なくされた。9年以降、新しい神社祭式も採用され、神輿がさらに詳細に氏子区域を渡御するため日数が2日間、3日間と徐々に増やされていった。

維新以降、神田祭は神輿が氏子区域を隈なく渡御し、氏子町々そして皇室、明治政府のある帝都東京の無事安全を祈願する「氏神祭礼、都市祭礼」へとその性格を変えていった。

江戸から東京へ、神田祭は江戸幕府の官祀・天下祭—天下泰平という徳川幕府の平和を祈願し祝祷する祭礼—から、氏神祭礼・都市祭礼—氏子町々と帝都東京の無事安全を祈願する祭礼—へと、その目的と意味を大きく転換していった。



東都日本橋大隊練行之図（明治大学博物館所蔵）



内国勸業博覧会における製糸機械（明治大学博物館所蔵）